

「放出の太閤さん」と呼ばれた

淀川の治水翁

# 大橋房太郎の偉業

明治18年(1885年)、淀川で大洪水が起こり、大阪市内の大部分と河内が水に沈んだ。

洪水は大都市に壊滅的な被害を与え、ある青年の人生を転換させた。河川法制定、淀川の大改修を実現に導いた政治家大橋房太郎である。

「治水翁」と称えられるほか、

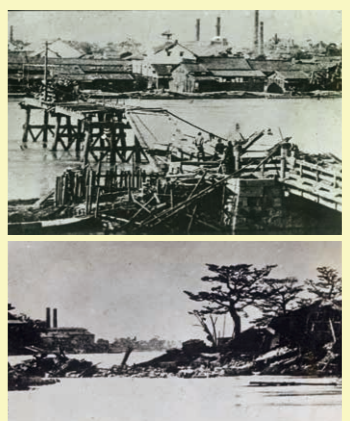
「放出の太閤さん」「短軀の熱血漢」「陳情の神様」「淀川屋さん」と、多くの呼び名で親しまれてきた。

耳目を引くエピソードも事欠かない。

その伝記「淀川の治水翁 大橋房太郎伝」を執筆した小川清さんと、曾孫の中村扶実さんに話をうかがい、彼の偉業と淀川の近代史をたどった。



おおはし ふさ たろう  
大橋房太郎  
(1860~1935年)  
政治家



(上)流失した天満橋  
(下)決壊した「わざと切れ」  
(淀川資料館蔵)

## 治山治水は治世の根本なり

大阪中心部が浸水し、  
広大な河内湖が出現

「淀川 大橋房太郎」とだけ書かれた、ハガキ大の名刺。これを携え、白いスーツに身を包んで国に陳情を重ねた。身長145cmだが声は大きく、情熱に満ちた弁舌は人の心の奥深くを突いたという。

生まれは大阪・放出。万延元年(1860年)、楠木正成ゆかりの大庄屋・大橋家に誕生した。法律家を目指し、東京で書生をしていた24歳の頃、淀川大水害の報せを聞く。

水害は6月・7月の2度にわたった。上町台地等を除く大阪市街が水中に没し、30余りの橋梁が流失。淀川左岸は、古代の河内湖が出現したような有様となった。

惨状を見た房太郎は、法律家になる夢を断ち、淀川治水に生涯をかけると決意。故郷へ戻り政治家の道を進む。

近代治水工事の始祖  
「淀川改良工事」

淀川は古来、氾濫を繰り返しており、上流から河口に

至る抜本的な治水工事が必要だった。しかし近代に入って前例のない難事業であり、房太郎はまだ社会的実績のない若者だ。

故郷に戻り、米屋を開いて生計を立てるうち、その覇気を買われて町村を支える戸長に就任。28歳で榎本村の村長、30歳で府議に当選し、淀川の大改修へ向け猛進していく。

房太郎の陳情は、やがて閣僚や国会議員へ。「治山治水は古代から治世の根本」と弁舌を振るい、総理大臣の松方正義や伊藤博文との面談にこぎつけた。そして明治29年

(1896年)、河川法案および、淀川改修議案が可決する。「淀川万歳!」と連呼する房太郎の声が、議場に響いた。近代治水工事の先駆け「淀川改良工事」の要点は、①宇治川の付け替え、②毛馬洗堰と閘門の建設、③新淀川の開

### 大橋房太郎の想いを継ぐ人々

伝記の著者・小川さんは広告会社勤務の後、家業を継承する一方で講演活動を展開。歌手の中村さんは作詞作曲の「MIO 澤～水都物語」に、曾祖父や淀川への思いを込め発信している。



淀川が房太郎を変え、房太郎が淀川を変えた

平岡珈琲店 店主  
郷土史研究家 小川清さん

房太郎は、自らの志で動いた人。裏からの根回しではなく、中央突破で前進した。いち早く河川法の制定を考え、房太郎の人生を変え、房太郎が淀川を大きく造り変えた。

小川清さん著  
『淀川の治水翁 大橋房太郎伝』



音楽を通し、水の恩恵や、古きよき大阪に思いを

房太郎のひ孫/シャンソン歌手  
中村扶実さん

近世から近代への過渡期、多くの意見に耳を傾ける政治家らがいて、みんなで淀川改修をなした。小川さんの講演と、私の音楽を両輪とし、今後も活動を広げたい。

CD・DVD  
『MIO 澤 水都物語』



削、④瀬田川洗堰の設置。房太郎は③の新淀川開削に向け、3000人ともいわれる地権者と交渉。ときに命を狙われながら工事実現に貢献した。後年、内務大臣・後藤新平が「治水翁」の称号を贈る。房太郎は、胃がんにより74

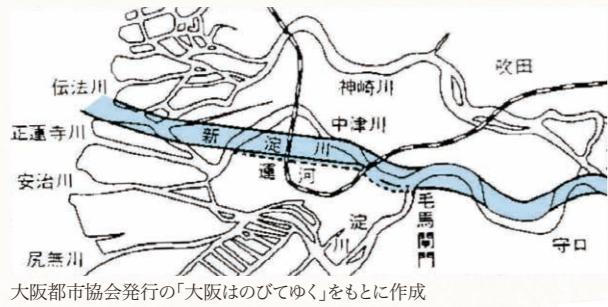
歳で死去。最期の言葉は、その日の雨を案じての「淀川は大丈夫か」。公共事業に私財を投じ、金銭には縁がなかった生涯。大阪市中央公会堂で市民葬がとり行われたが、これは、名高い大阪市長・關一と房太郎の2例のみである。



白い礼装で陳情に臨んだ大橋房太郎

## 5 新淀川の開削

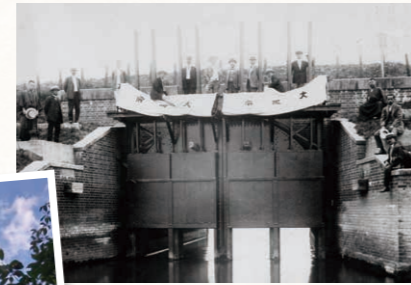
かつて淀川下流部は、大川(旧淀川)、中津川、神崎川の3つに分かれ、川幅が狭く蛇行していた。大改修「淀川改良工事」により、川幅500mを超える、ほぼ真っすぐの放水路(新淀川)が開削された。



## 6 毛馬の洗堰・閘門

守口から大阪湾まで、約16kmにわたって整備された新淀川。元の本流、大川との分岐点・毛馬に洗堰が設けられ、洪水時、大阪中心部に流入する水量を調節できるようになった。同時に、舟運のため水位を調節する毛馬閘門が造られた。

淀川改良工事の竣工は明治42年(1909年)。ここ毛馬の閘門で式典が開かれ、工事の立役者である房太郎も祝辞を述べる。この工事は、淀川の治水能力を劇的に高め、日本各地の治水対策に大きな影響を与えた。当時の洗堰と閘門の一部が今も保存され、国の重要文化財に指定されている。



(上)明治42年、毛馬閘門で行われた竣工式(左)淀川改修紀功碑



## 4 網島の水防碑

明治18年6月に起こった、淀川大洪水の第一波で、淀川支流・寝屋川の全堤防が破壊寸前となり、造幣局や大阪府庁など政治経済の中心部が水没の危機にさらされた。そこで、洪水の濁流を淀川へ戻すため、現・藤田美術館がある網島の堤防が切り崩された。俗に言う「わごと切れ」である。さらに、6月下旬から7月初めにかけて大雨・暴風が襲い、堤防の「わごと切れ」が逆に水を呼び込む事態となった。



碑の裏側に「わごと切れ」の説明が刻まれている

現在、大川沿いのひょうたん池前にひっそりと「水防碑」が立つ。

### ◎松下家

24歳の房太郎が、淀川の大洪水を機に帰郷し、生計を立てるため米屋を営んだ建物。買い物客が来るたび、淀川の治水工事の大切さを訴えたので「あれは米屋さんやない、淀川屋さんや」と呆れられたとか。現在は人手に渡っているが、端正なたたずまいが残り、街道に趣を添えている。



若き房太郎が米屋を営んだ、現・松下家

### ◎阿遅速雄(あちはやお)神社

境内に「発起人・大橋房太郎」と刻まれた日露戦争記念碑がある。



阿遅速雄神社

# 淀川の大改修と大橋房太郎の足跡

人々の生命を子々孫々まで守るため、淀川の治水に生涯をかけた大橋房太郎。近代日本の治水工事の祖となった大規模改修「淀川改良工事」ゆかりのスポットをめぐる。

枚方

1



明治18年 淀川洪水碑

## 1 明治18年淀川洪水碑

明治18年  
淀川洪水の  
説明板



明治18年(1885年)6月中旬、豪雨により枚方市の天野川堤防と、伊加賀村付近の淀川堤防が決壊(伊加賀切れ)。たちまち茨田周辺が水没、さらに水勢が増して浸水は大阪市域におよんだ。また、7月初めの暴風雨によって、修復工事中の伊加賀堤防が再び破れ、淀川本・支流の堤防がほぼ全て決壊、被災人口は約276,000人に達した。当時、旧堤防から後退し、弓形に築かれた仮堤防の跡が、碑の南西の区割りに残り、地図でも確認できる。

四條畷

2

## 2 四條畷神社の大橋房太郎紀功碑・治水翁碑

房太郎は治水翁の称号のほか、藍綬褒章を2度受けている。大橋家は楠木正成・正行に仕えていたことから、楠木家とゆかりの深い四條畷神社に、房太郎を顕彰する紀功碑と、後藤新平子爵の書による治水翁碑が建てられた。



碑翁水治

「子爵後藤新平」の署名がある「治水翁碑」題字

(左)四條畷神社  
(右)境内に堂々と立つ顕彰碑

## 3 はなてん 放出エリア

明治時代、放出を流れる寝屋川その他の水路は地域を潤す反面、水害をもたらした。放出で生まれた房太郎ゆかりの場所へ。



◎寝屋川改修碑

房太郎は淀川だけでなく、寝屋川の改修にも貢献した。陳情の末、大阪府は大正11年(1922年)、寝屋川改修に着工し、昭和2年(1927年)に新喜多橋~徳庵区間が竣工。その記念碑が放出東児童公園に立つ。

### 放出の名前の由来

7世紀、新羅の僧・道行が熱田神宮から草薙の剣を盗み出し、船に乗り込んだが、難波津で大嵐に遭い放出付近に漂着した。道行は「天罰が下った」と恐れ、剣を放り出して逃亡。これが地名・放出(はなてん)の起源になったといわれる。



(上)正因寺  
(左)房太郎の墓



◎正因寺

大橋家の墓所。かつて、旧寝屋川と並行して流れていた六郷川の「修堤碑」があり、寝屋川・六郷川の改修にも尽力した房太郎の功績や事業内容が記されている。房太郎の墓石の左右に、共に地方行政に注力した方々の墓や顕彰碑がある。また、寺の門前には中高野街道碑が立ち、旧道の由来を伝えている。

